



トガリネズミラヴァー
六田晴洋の

私たちの ご近所さん



VOL. 12 「巡る季節と生き物の暮らし」

神奈川県から白糠町に移住して、早いものでこの4月で丸3年。道東を中心に、これぞ北海道という生き物や風景を撮影してきました。冬になればさまざまな渡り鳥がやってきて、春になれば川ではサケの稚魚が泳ぎ始めます。他にも書き切れないほど多くの生き物たちの暮らしが、季節とともにぎゅぐゅと繰り返されています。もちろん本州などでもそれは同じなのですが、冬が厳しい



オシロワシと流水



川をくだるサケの稚魚

北海道では特に、その尊さを感じるが増えました。

流水がもたらす恵み

冬、オホーツク海に流れ着く流水。この流水はシベリア沿岸の海水が凍ってできたものです。それが冬の終わり頃に溶ける時、氷の中で育った大量の植物プランクトンが北海道の海に放出さ

れるのだそうです。それが動物プランクトンの食べ物となり、それを食べる海の生き物たち、魚を主食とするワシ、さらには私たち人間を支えています。こうしたバランスの上に成り立っている自然と、その恩恵を受けている人間。時代がどんなに進んでも、それは変わらないだろうし、忘れてはいけないことだと思っています。

春の風物詩

3月から4月にかけて、川ではサケの稚魚たちの姿が目立つようになります。サケの卵は積算温度と言って、1日の平均水温を毎日合計した温度が、およそ480度に達するとふ化するという習性があります。冬の間に川底で卵からかえった子どもが、春になると海を目指して川

をくだるのです。今となっては私にとつての春の風物詩であるこのサケの稚魚たち。の中には、人が飼育してふ化させ、放流した稚魚も混ざっています。しかし、秋に川に帰ってくるサケの多くが、飼育下ではなく川で生まれたものであるという調査結果もあります。サケの子どもたちは、ここからおよそ4年間、ベーリング海やアラスカ湾などを巡る長い旅に出ます。その厳しい過程で生き残るためには、自然下で生まれることが大事だといふのはとても興味深いのです。

PROFILE

六田晴洋

ろくたはるひろ

1986年生まれ。

2021年に白糠町へ移住。大学卒業後、フリーランスのカメラマンやディレクターとして野生動物や自然風景を撮影している。E-mail rokuta@six-h.com

